平成３０年度

社 会 情 報 学 部 小 論 文 問 題

（推薦入試）

注意事項

１　試験開始の合図があるまでは、この冊子を開いてはいけません。

２　問題冊子と解答用紙は以下のとおりです。
（１）　問題冊子・・・・・・・５ページ
（２）　解答用紙・・・・・・・２枚
（３）　下書用紙・・・・・・・２枚

３　問題冊子及び解答用紙に、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。

４　解答は、指定の解答用紙に記入してください。

５　解答用紙の所定の欄に氏名と受験番号を必ず記入してください。

６　試験時間中、解答した解答用紙を脇に置く場合は、不正行為防止のため解答用紙を裏返して置いてください。

７　解答用紙はすべて回収します。問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人が本を読まなくなった。あれほど堅固に見えた〈紙の本〉への信頼感がぐらりと揺らいだように思える。このさき私たちの読書環境はどう変わってしまうのだろうか。

こうした不安をもたらした犯人はデジタル革命だという説があります。ゲームやＳＮＳのせいだとか、なにもかもインターネットがわるいのだとか――。

でも、はたしてそう簡単にいいきってしまえるのかどうか。

だいいち若者の「本ばなれ」が顕著になった 70 年代末には、デジタル時代はまだ緒についたばかり。戦後はじめて本の総売上が下降に転じたのも、インターネットや携帯電話が広く定着したのも、すべて 90 年代が終わり近くなってからのことなのです。であるからには、どう考えても読書習慣のおとろえの責任をまるごとデジタル革命に負わせることにはむりがある。それよりも、このおとろえは二十世紀後半、デジタル革命の開始以前に、〈紙の本〉の世界の内側で徐々に醸成されてきたと考えておくほうが、よほど自然なのではないだろうか。

もうひとついえば、新しく興隆したメディアが〈紙の本〉をほろぼすという危機の構図にしても、それ自体は新しいものではなく、すでに出版産業化が本格化した 1920 年代にはすがたを現していました。このときの本の敵は映画（無声映画）です。たとえばチェコの人気作家でジャーナリストのカレル・チャペック。かれは 1925 年に、早くも成熟期に足を踏み入れた映画の力をたたえて、これからは本を読む「概念的タイプ（老年世代）」にかわって映画で再教育された「視覚型人間（現代の人間）」が増えてゆくだろう、と予言していた。

> 読書タイプの人間は忍耐強い。周囲の状況を認識し、事件の記録のなかに腰を据え、話を最初から最後までたどっていくだけの十分な時間を取る。
>
> 視覚的タイプはそれほど忍耐強くありません。状況を一目で把握し、時間をかけずに話の筋を飲み込んでしまいたがります。そして、次の瞬間にはもう新しい何かを物色しているのです。しかし、もしかしたら、たっぷり息を吸うために、映像の急流から逃れ、本に戻る人も出てくるかもしれません。（略）多

分ね、そんなこと誰にわかるのです？――多分、書物はだんだんと死に絶えていくでしょう。もしかしたらバビロンの文字の書かれた煉瓦（れんが）のように奇妙な記念碑になるでしょう。でも、芸術は死に絶えることはありません。

（「目の世代」）

文脈がすこし混乱しているので、チャペックが「本に戻る人」に批評的な距離をおいているようにも読めます。でも、たぶんそうじゃないな。かれが人間をつくりかえる映画特有のスピード感に魅せられていたのは事実でしょうが、それと同時に、ねばりづよく「周囲の状況を認識」し、十分な時間をかけて「最初から最後まで」話につきあうという「読書タイプの人間」の習性にも、おなじくらい、もしくはそれ以上につよく共感していた。チャペックが同時期に書いたいくつかのエッセイから見ても、かれのうちに「進歩する人間」とならんで、ひとりの確信的な「本に戻る人」がいたことはあまりにもあきらかなのです。

そして、このチャペックのうちなる「読書タイプの人間」と「視覚型人間」との葛藤の劇が、百年後、映画をインターネットに、「視覚型人間」を「デジタル型人間」におきかえて、そっくりそのまま繰りかえされます。私の場合でいえば、数年まえ、たまたま雑誌で津村記久子の「咳と熟読」という文章を読み、おや、おれは以前、これと似たようなことをどこかで読んだことがあるぞと、チャペックのこのエッセイのことを思いだした。

津村の「咳と熟読」によると、いっとき本をはなれてインターネットに熱中した彼女は、やがてネット情報の「瞬間湯沸かし」的な収集に疲れて、ふたたび本を読むようになったらしい。「情報」をいそがしく「脳味噌に注入」するかのごとき「飽和状態」のなかで「逆説的に、自分が本から得ていた主な栄養は「情報」ではないのだな」と気づいたというのです。

本を読み始めた頃、読むことは、ひたすら体験だった。図書室で借りてきた本のぼろぼろさ加減とその物語は、一体のものとなって記憶されている。喘息（ぜんそく）の発作の後、親に隠れて本を読んでいる自分自身もまた、物語の一部だったように思える。ああ、『チム・ラビットのぼうけん』はおもしろかったなあ、と

思い出す時は、必ず、小学二年の時に住んでいたマンションの六畳の寝室と、窓から差し込む昼間の光と、苦かった薬と裏腹に魅力的だった吸入器の味のことを思い出す。

そういう、体を伴った読書を再び求める。

ネット情報とのつきあいに疲弊して「読書を再び求める」ようになった。つまりはそういうこと。彼女もまた、チャペックがいう「たっぷり息を吸うために、映像〔情報〕の急流から逃れ、本に戻る人」のひとりだったのです。

チャペックと津村記久子――。

この二人の作家の百年の時をへだてた体験をならべてみると、〈読書の黄金時代〉としての二十世紀が、じつは終始、かならずしも安定したものでありつづけていたわけではないことがわかります。いかにも私たちは、いまデジタル革命の衝撃で〈紙の本〉がはじめて危機にさらされているように感じている。でもちがうんですね。チャペックによると、すでに前世紀の 20 年代、〈読書の黄金時代〉がその盛期にさしかかろうとするころには、映画の成熟によって、かれ自身をふくむ本好きたちまでが、いち早く、その危機を予感するようになっていたらしい。

そして、この点にかかわってもうひとつ見すごしてならないのが、この危機が同時に〈紙の本〉の力を人びとが発見しなおす機会になったということです。

（中　略）

いまの学生はたしかにあまり本を読まない。だからといってかれらが「もう本なんかなくてもいいや」と考えているのかといえばさにあらず。教室でなんどか試みたアンケートによると、むしろ「なくなっては困る」と感じている者のほうが圧倒的に多いのです。そこで「なぜ困るの？」ときくと、たいていは「毎日の暮らしのなかで、いまあるような本とつきあうことの楽しみをなくしたくない」という意味の答えがもどってくる。

「紙の本にさわったり、めくったりするときのいい感じを捨ててしまうのはもったいない」

「じぶんの本棚に好きな本がならんでるのを見ていると、なんとなく安心するんです」

「本って記憶ですよね。夕方、どこかの町の喫茶店の窓際の席であの本を読んだなとか、本にはそれを読んだときの記憶がくっついてるでしょ」

なのにインターネット経由、ケータイやスマートフォンで読む本(つまり電子本)には、そうした一切が欠けている。あれはやっぱり読書とはいえないんじゃないですか、というのですね。

だから、やはり津村のいう「体を伴った読書」なのですよ。〈紙の本〉は一点一点がべつの顔、べつの外見をもっている。しかし〈電子の本〉では、すべての表現が特定の企業や特定の技術者がつくったハードやソフトの平面に均(なら)されてしまう。ＳＦＸ映画みたいなもので、どれも同じような味しかしないから、いずれは飽きる。それに飽きたり疲れたりした者がふたたび〈紙の本〉に向かう。すなわち「体を伴った読書」にもどる。そしてそこでは一点一点の本の個別性や多様性がきちんと保持されている。そうじゃないとみんなが困るのです。

もちろん実際には、かれらはあまり本を読んでいません。ただし毎日新聞社が戦後つづけてきた読書調査によると、近年は、「このごろの若い連中はちっとも本を読まない」となげく老人たちのほうが若者以上に本を読んでいないらしい。とすれば、なにも「若い連中」にかぎらない。中高年をふくむすべての日本人がしだいに本を読まなくなるなかで、かれらも本を読まなくなった。そう考えておくほうがより正確なようなのです。

――明治の終わりから大正にかけて、人びとが年齢や地域や性別や学歴の差をこえていっせいに本を読むようになり、そこから〈読書の黄金時代〉としての二十世紀がはじまった。

以前、私はたしかにそうのべました。

ところが、その二十世紀が終わって、つぎの世紀にはいると、おなじく年齢や地域や性別や学歴の差をこえて、おおくの日本人がやはりいっせいに本を読まなくなっていた。どんな本好きも、いや本好きであればあるほど、さまざまな調査や本の売れ行きの急激な減少から、なによりも日常の実感として、その変化をみとめざるをえなくなったのです。その結果、いつのころからか、私たちは「遠からずわれわ

れの社会から日常的に本を読む習慣が失われてしまうかもしれない」という、ぼんやりした不安をいだくようになった。

しかし、たとえそうだとしても、幼いころからの「体を伴った読書」の記憶が消えてしまうわけではありません。その個人的な記憶に、紫式部や菅原孝標の女（むすめ）にはじまる日本人の読書の集団的な記憶がかさなり、そのことが、ふだんあまり本を読まない人たちをも辛うじて本にむすびつけている。したがってこのさきも、そこに行けばかならず多様な本があり、じぶんの関心をどんな方向にでも深めてゆけるような環境が安定的に確保されつづけるなら、いちどは本を読まなくなった人びとがふたたび本を読みはじめる可能性だって、まったくないわけではないのです。

出典：津野海太郎『読書と日本人』（2016 年　岩波新書）

（出題の都合上、原文の表記を変更した箇所がある）

問１　下線部「これと似たようなことをどこかで読んだことがあるぞ」について、著者は、津村記久子とチャペックの文章の類似性を指摘しているが、どのような点が似ているというのか。本文の内容をふまえて説明しなさい。（400 字程度）

問２　本および読書は、今後どうなっていくと思うか。本文をふまえて、あなたの意見を述べなさい。（600 字程度）